

授業計画書

基本情報	科目名称	心理学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者			実務経験		成績評価責任者
	中山 麻子					中山 麻子

教科書	生活にいかす心理学 ver. 2 ナカニシヤ出版

授業の方法及び内容	パーソナリティ、心の健康、集団心理、学習と記憶等、心理学の基礎知識を学ぶ。 グループワークも実施し、ディスカッションを行う。
到達目標	心理学の基礎知識を習得する。 自己理解および他者理解を深め、コミュニケーション力を身につける。
準備学習の内容	ディスカッションのテーマを事前に告知し、自身の考えを深めておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	基礎知識の習得を行う。グループワークではディスカッションを通し、コミュニケーション力、思考力を高めていく

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	心理学の概要 心理学とは。心理学の方法
2	知覚と感覚① 知覚の成り立ち
3	知覚と感覚② 知覚の諸相
4	経験の働き① 反射と学習、学習のメカニズム
5	経験の働き② 記憶と忘却
6	人間の空間行動① パーソナル・スケール
7	人間の空間行動② 生活空間の認知
8	パーソナリティ① 自分らしさとは。パーソナリティの分類
9	パーソナリティ② パーソナリティ検査、心理テスト、その人らしさの成り立ち
10	心の揺らぎ① 健やかな心とは。心が揺れるとき、心の危機
11	心の揺らぎ② 心の健康について
12	人との関わり① 対人認知、対人魅力
13	人との関わり② 説得と態度変容、援助行動、攻撃行動
14	集団について① 集団の特徴、リーダーシップ理論
15	集団について② 集団間葛藤の解決
16	コミュニケーション行動① コミュニケーションとは
17	コミュニケーション行動② 非言語的コミュニケーション
18	情報と人間行動 ネットワーク社会での情報行動
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	薬理学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	木村 麻記					木村 麻記

教科書	『いちばんやさしい薬理学』 成美堂出版 まとめ問題集(講師作成)
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	スライドまたは板書による講義
到達目標	薬物の作用点、薬物動態、薬効に影響を与える因子、各治療薬について理解し、説明できる。
準備学習の内容	次回の講義内容に該当する教科書の範囲を読む
授業期間全体を通じた授業の進め方	講義を行い、期間中に形成的評価を1回実施する

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	1 薬理学の基礎 医薬品の分類、薬物療法の目的について説明できる
2	1 薬理学の基礎 薬物の投与経路と剤形について説明できる
3	2 薬理学各論 抗炎症薬について説明できる
4	2 薬理学各論 解熱鎮痛薬について説明できる
5	2 薬理学各論 循環器系（血圧・心疾患）の薬について説明できる
6	2 薬理学各論 循環器系（止血・抗血栓・抗貧血）の薬について説明できる
7	2 薬理学各論 循環器系（止血・抗血栓・抗貧血）の薬について説明できる
8	2 薬理学各論 糖尿病治療薬について説明できる
9	2 薬理学各論 骨粗鬆症治療薬について説明できる
10	2 薬理学各論 消毒薬について説明できる
11	中間試験
12	3 薬理学総論 薬物の用量と作用メカニズムについて説明できる
13	3 薬理学総論 薬物動態（吸収、分布、代謝、排泄）について説明できる
14	3 薬理学総論 薬物動態（吸収、分布、代謝、排泄）について説明できる
15	3 薬理学総論 薬物動態（投与経路の違いと血中薬物濃度の変化）について説明できる
16	3 薬理学総論 薬物相互作用について説明できる
17	3 薬理学総論 薬効に影響を与える因子について説明できる
18	まとめ
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生物学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	通年（前期）	1年	4	80
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	澁川 義幸					澁川 義幸

教科書	『生物学』講義資料（講師作成）
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	板書による解説、スライドを用いた解説 電子黒板を活用したスライドと板書のハイブリット講義
到達目標	生体の動物性機能と植物性機能の柔道整復学における重要性を理解し、対象疾患の病態と療法の生理学的基盤を説明できる。
準備学習の内容	講義予定部（シラバス参照）の教科書の講読
授業期間全体を通じた授業の進め方	プレテストの実施、解説を含めた講義、ポストテストの実施 形成評価を各期1回行う

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	生体の最小構成単位を説明できる：元素記号を覚える事が出来る
2	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）を構成するイオンを説明できる
3	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）を構成する溶液濃度を説明できる
4	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）の水素イオン濃度を説明できる
5	生体の最小構成単位を説明できる：呼吸と排泄に関連する Henderson-Hasselbalch の式を説明できる
6	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）の浸透と浸透圧を説明できる
7	3 大栄養素を説明できる：3 大栄養素と消化機能
8	糖質を説明できる：栄養素としての単糖・二糖・多糖について説明できる
9	タンパク質を説明できる：栄養素としてのアミノ酸を説明できる ペプチド結合を説明できる
10	脂質について説明できる：栄養素としての脂肪酸を説明できる
11	核酸を説明できる：DNA と RNA を説明できる
12	代謝：異化と同化
13	代謝を説明できる：生体のエネルギーである ATP 生成を説明できる
14	代謝：糖代謝・タンパク質・脂質・核酸代謝
15	代謝：タンパク質・核酸
16	代謝：脂質
17	細胞構造と機能を説明できる：生物の分類と細胞の種類
18	細胞構造と機能を説明できる：細胞小器官
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生物学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	通年（後期）	1年	(4)	(80)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	澁川 義幸					澁川 義幸

教科書	『生物学』講義資料（講師作成）
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	板書による解説、スライドを用いた解説 電子黒板を活用したスライドと板書のハイブリット講義
到達目標	生体の動物性機能と植物性機能の柔道整復学における重要性を理解し、対象疾患の病態と療法の生理学的基盤を説明できる。
準備学習の内容	講義予定部（シラバス参照）の教科書の講読
授業期間全体を通じた授業の進め方	プレテストの実施、解説を含めた講義、ポストテストの実施 形成評価を各期1回行う

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	細胞構造と機能を説明できる：神経機能と細胞膜
2	細胞構造と機能を説明できる：遺伝
3	細胞構造と機能を説明できる：生殖と核細胞分裂
4	細胞構造と機能を説明できる：体細胞分裂・減数分裂
5	生理学概論：上皮組織と腺
6	生理学概論：支持組織
7	生理学概論：神経組織 1
8	生理学概論：神経組織 2
9	生理学概論：消化器機能
10	生理学概論：循環器機能
11	生理学概論：呼吸器機能
12	生理学概論：泌尿器機能
13	生理学概論：血液機能
14	生理学概論：内分泌機能 1
15	生理学概論：内分泌機能 2
16	生理学概論：感覚器機能
17	総復習 1
18	総復習 2
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	健康科学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	後期	1年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	土反 康裕					土反 康裕

教科書	『これからの健康科学』
参考文献・資料等	特になし

授業の方法及び内容	人間・環境・社会のつながりを「健康」を通して科学していく。
到達目標	健康科学とは「健やかに老いる」ためにどのようにすればよいか、すべての分野を視野に入れ健康論を理解する。 健康とは何か、健康科学の概要を理解し、説明ができる。 食事と運動による健康増進・環境と健康を理解し、説明ができる。
準備学習の内容	統計から健康を捉える。 運動生理学、栄養学の基礎を学ぶ。
授業期間全体を通じた授業の進め方	予防観点（運動・栄養・休養）から健康を支えるための実践知の意義を学ぶ。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	生物学から学ぶ健康科学の概要
2	統計からみた健康①
3	統計からみた健康②
4	統計からみた健康③
5	肥満と生活習慣病
6	喫煙と飲酒
7	加齢と健康
8	栄養①（代謝と栄養）
9	栄養②（ダイエットと競技力向上）
10	運動と健康（運動生理学とトレーニング理論の基礎）
11	運動プログラムの作成①
12	運動プログラムの作成②
13	感染症
14	アレルギー性疾患
15	環境と健康（病原体と免疫）
16	環境と健康（紫外線の影響、大気汚染と健康、公害）
17	ストレスと健康①（メンタルヘルス）
18	ストレスと健康②（メンタルヘルス）
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	英語			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	後期	1年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	高瀬 愛子					高瀬 愛子

教科書	English for Care and Hospitality I
参考文献・資料等	自作のプリント（医学英語入門 朝倉書店を中心として参考書多数を参考とした）を用いる。

授業の方法及び内容	テキストを用いて、これを基本として読み進めていく。その中でみられる文法をピックアップしてプリントを用いて進めていく。
到達目標	医療スタッフになるための実務的英語力を身に付ける。
準備学習の内容	次回に学習する箇所を予告してテキストに目を通させる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	語学は黙って講義を聴くということではなく、言葉として声を出して発表や、音読を重視して行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	Unit8 Introduction(p32~35) Print1
2	Unit8 month date weather
3	(p30~31) Useful words Parts of the body Print2
4	(p30~31) 1 医学英語の基本 接頭語 接尾語 Print3
5	1~4 回の復習
6	Unit1 Print4 数詞等
7	Unit2 Print5 助動詞
8	Unit2 後半 Print6 名詞
9	Unit3
10	Unit4 Print7 疑問詞の使い方
11	Unit5 Print8 命令文を使う
12	6~11 回の復習
13	物語文を読む Print9
14	名詞、冠詞の使い方
15	不定詞1 Print10
16	不定詞2 Print10
17	Unit6
18	Unit7 期末試験前の総合学習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	情報リテラシー			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者			実務経験		成績評価責任者
	指田 聡子					指田 聡子

教科書	『Windows10 対応 30 時間でマスター Office2016』
参考文献・資料等	なし

授業の方法及び内容	情報化・デジタル時代のビジネスに不可欠な基本的なビジネスソフト（Office2016）の使い方を学ぶ。
到達目標	将来、役に立つ医療情報の入手や検索の方法、ビジネス文書作成、データ集計・分析を習得する。
準備学習の内容	事前学習として、テキストをよく読み、パソコン操作の手順を覚える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	授業は、全体で基本操作をやり理解した後に、各自で実習問題を取り組み、完成したデータを提出。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は16回以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	授業について（テキスト・内容・課題提出について）、Office モバイル、キーボード（キーの名称とその機能）
2	Windows10 の基礎、画面構成、Word2016 起動、終了、Word2016 の画面構成
3	Word2016 文字の入力方法、ファイルの保存と読み込み、ページ設定、文書作成
4	Word2016 ビジネス文書の構成、文字の拡大と縮小、文字の装飾
5	Word2016 表を活用した文書の作成（基本的な操作）
6	Word2016 表を活用した文書の作成（応用的な操作）
7	Word2016 画像を活用した文書の作成（基本的な操作）
8	Word2016 画像を活用した文書の作成（応用的な操作）
9	Word2016 総まとめ
10	Excel2016 基本的なワークシート編集（データ入力、オートフィル）
11	Excel2016 基本的なワークシート編集（データの移動、コピー）
12	Excel2016 簡単な計算式入力
13	Excel2016 関数の利用（Sum, Average, Max, Min）
14	Excel2016 関数の利用（Count, Counta）、罫線、相対参照と絶対参照
15	Excel2016 グラフ①
16	Excel2016 グラフ②、条件判定（If）
17	Excel2016 条件判定（If 複合条件）、AND 関数、OR 関数
18	Excel2016 関数の利用（Rank）、Excel の便利な機能①
19	Excel2016 関数を利用した検索（Vlookup）、Excel の便利な機能②
20	Word2016、Excel2016 の総まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年 (前期)	1 年	4	80
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	渡邊 利明					渡邊 利明

教科書	『解剖学』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 解剖学全般の復習、国家試験対策としての過去問題の練習。 2) 講義を中心として基礎医学たる解剖学の実践 (実習) をも含み進行させる。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) テキストに記載される重要基礎用語である「太字用語」説明できる。 2) 柔道整復師国家試験出題基準の内容を消化し、簡単に説明できる。
準備学習の内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 前回提示されたテキスト内容を読み内容を把握する。 2) 指示されたノートの書式を形成する。(講義内容を右頁へ、復習内容を左頁へ記載する。)
授業期間全体を通じた授業の進め方	<ol style="list-style-type: none"> 1) 小テスト、中間テスト、期末テストによる評価を前提とし、ノートを重要視する。 2) カルテの記載方法に関連して、目前にある疾患を想定して学問を進める。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は 80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点		

授業計画

1	解剖学総論・・・方向用語・人体区分
2	解剖学総論・・・組織と細胞
3	解剖学総論・・・骨格・関節・筋
4	運動器系・・・上肢骨と上肢筋①
5	運動器系・・・上肢骨と上肢筋②
6	運動器系・・・上肢骨と上肢筋③
7	運動器系・・・体幹の骨と体幹筋
8	中間試験・・・解説
9	運動器系・・・下肢骨と下肢筋①
10	運動器系・・・下肢骨と下肢筋②
11	運動器系・・・下肢骨と下肢筋③
12	循環器系・・・心臓 1
13	循環器系・・・心臓 2・肺循環・体循環
14	循環器系・・・動脈系 1
15	循環器系・・・動脈系 2
16	循環器系・・・動脈系 3
17	循環器系・・・静脈系 1
18	循環器系・・・静脈系 2、リンパ系
19	期末試験
20	試験の総括（試験問題の解答・解説）

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年 (後期)	1 年	(4)	(80)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	渡邊 利明					渡邊 利明

教科書	『解剖学』 南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 解剖学全般の復習、国家試験対策としての過去問題の練習。 2) 講義を中心として基礎医学たる解剖学の実践 (実習) をも含み進行させる。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) テキストに記載される重要基礎用語である「太字用語」説明できる。 2) 柔道整復師国家試験出題基準の内容を消化し、簡単に説明できる。
準備学習の内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 前回提示されたテキスト内容を読み内容を把握する。 2) 指示されたノートの書式を形成する。(講義内容を右頁へ、復習内容を左頁へ記載する。)
授業期間全体を通じた授業の進め方	<ol style="list-style-type: none"> 1) 小テスト、中間テスト、期末テストによる評価を前提とし、ノートを重要視する。 2) カルテの記載方法に関連して、目前にある疾患を想定して学問を進める。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は 80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点		

授業計画

1	頭部の解剖・・・頭蓋骨 1
2	頭部の解剖・・・頭蓋骨 2
3	頭部の解剖・・・動脈系 1
4	頭部の解剖・・・動脈系 2・静脈系
5	消化器系の解剖・・・消化器系とは 消化管とは 消化器系の血管
6	消化器系の解剖・・・上部消化器 1
7	消化器系の解剖・・・上部消化器 2
8	消化器系の解剖・・・中間試験・・・解説
9	消化器系の解剖・・・下部消化器 1
10	消化器系の解剖・・・下部消化器 2
11	消化器系の解剖・・・肝・胆・膵 1
12	消化器系の解剖・・・肝・胆・膵 2
13	呼吸器系の解剖・・・呼吸器系とは 呼吸器の血管
14	呼吸器系の解剖・・・上気道と下気道
15	呼吸器系の解剖・・・肺と胸膜
16	腎泌尿器系の解剖・・・腎の構造 1
17	腎泌尿器系の解剖・・・腎の構造 2
18	腎泌尿器系の解剖・・・尿路の構造
19	期末試験
20	試験の総括（試験問題の解答・解説）

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年 (前期)	1 年	4	80
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	青木 良仁					青木 良仁

教科書	『生理学』 南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	専門知識に対して初学の生徒が多いため、専門用語や生物の成り立ちを覚えてもらうことを心がけ、生理学の面白さを知ってもらうことで学習意欲を高めていく。
到達目標	基礎知識として細胞、筋肉系、神経系、内分泌系の名称や働きを身につけてもらい、2年次以降の教科の礎を築いてもらう。
準備学習の内容	生理学に興味を持ってもらえるよう様々なトピックスを提供し、それにまつわる書籍等を紹介し知識を増やしてもらう。
授業期間全体を通じた授業の進め方	基本的にテストによる評価を前提とするが、次年度以降の講義の理解度にも影響する基礎教科のため普段の講義の理解を重要視して進めていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	細胞膜、染色体と遺伝
2	細胞内小器官
3	組織、器官系
4	生体の恒常性
5	体液の区分と組成
6	骨格筋の構造と収縮、弛緩
7	骨格筋と張力、筋電図
8	心筋、平滑筋
9	神経の静止膜電位、活動電位
10	興奮伝導、伝達物質
11	脳の高次機能
12	内蔵機能の調節
13	運動の調節
14	運動単位
15	脊髄反射
16	脳幹による運動調節
17	高次運動機能
18	復習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年 (後期)	1 年	(4)	(80)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	青木 良仁					青木 良仁

教科書	『生理学』 南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	専門知識に対して初学の生徒が多いため、専門用語や生物の成り立ちを覚えてもらうことを心がけ、生理学の面白さを知ってもらうことで学習意欲を高めていく。
到達目標	基礎知識として細胞、筋肉系、神経系、内分泌系の名称や働きを身につけてもらい、2年次以降の教科の礎を築いてもらう。
準備学習の内容	生理学に興味を持ってもらえるよう様々なトピックスを提供し、それにまつわる書籍等を紹介し知識を増やしてもらう。
授業期間全体を通じた授業の進め方	基本的にテストによる評価を前提とするが、次年度以降の講義の理解度にも影響する基礎教科のため普段の講義の理解を重要視して進めていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	感覚の一般的特性
2	特殊感覚：視覚、聴覚
3	特殊感覚：平衡感覚、味覚、嗅覚
4	体性感覚
5	内蔵感覚
6	痛覚
7	発痛物質、システム
8	内分泌腺とホルモン
9	視床下部、下垂体のホルモン
10	甲状腺、副腎のホルモン
11	腎臓、膵臓、生殖器系のホルモン
12	ホルモンによる恒常性
13	性分化
14	男性生殖器
15	女性生殖器
16	妊娠と分娩
17	復習
18	復習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	衛生学・公衆衛生学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	後期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	若山 葉子					若山 葉子

教科書	『衛生学・公衆衛生学』 南江堂
参考文献・資料等	国民衛生の動向 2019/2020 厚生労働統計協会

授業の方法及び内容	テキストを中心に、スライド・参考資料を用いて講義を行う。直近の公衆衛生学的話題、社会の動向についても解説を加える。適宜小テスト等を実施し理解度を確認する。
到達目標	将来地域社会で保健・医療・福祉の一端を担うにふさわしい、公衆衛生学的学識と教養を確実に身につけ、国家試験合格を目指す。自身の社会的役割・責任・貢献等について考えを深める。
準備学習の内容	予定される授業内容のテキスト範囲に目を通し、授業展開の概要を把握する。他の基礎科目との関連についても理解しておく。保健・医療・福祉分野の社会的動向等について、種々のメディアを通して情報を受け止めておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	一方の知識・情報の伝達ではなく、双方向の意思疎通をはかり、学生の理解度を確認しながら進める。国家試験の動向・傾向を踏まえ、ポイントを示唆する。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	衛生学・公衆衛生学の概要： 健康の定義 生活習慣と健康（わが国の健康課題） 公衆衛生活動の基礎（PHC HP） 疾病分類
2	健康の測定（1）人口静態統計-国勢調査（人口構造 人口指標 人口の推移・将来予測） 人口動態統計（死亡をもとにした指標・主要死因 出生をもとにした指標） 生命表
3	健康の測定（2）保健統計-国民生活基礎調査・患者調査（病気をもとにした指標） わが国の疾病構造
4	疾病の予防と健康管理： 予防の3段階 疾病の要因（生活習慣の現状と対策） 健康日本21（第二次） 集団検診 スクリーニング検査の精度
5	主要疾患の要因と予防： がん 循環器疾患 代謝疾患 骨疾患
6	感染症の予防（1）感染症成立の条件 感染症の種類（ウイルス感染症 細菌感染症） 感染症の発生動向
7	感染症の予防（2）感染症予防対策（成立要因別の対策 感染症法に基づく対策 院内感染対策 予防接種）
8	消毒（1）消毒実施上の注意 消毒の種類（物理的消毒法 化学的消毒法）
9	消毒（2）消毒の応用 手指の消毒 施術における消毒 院内感染対策（スタンダード・プリコーション）
10	環境保健（1）人間と環境 地球環境問題 環境要因と健康 環境汚染 公害
11	環境保健（2）環境政策 最近の環境問題 生活環境衛生（上下水道 住居 廃棄物）
12	食品保健： 栄養（現状と対策） 食中毒（食中毒の種類・発生状況 予防対策） 食品の安全対策
13	産業保健： 職業病 労働災害の現状と補償 職場の健康管理 雇用統計
14	精神保健： 主な精神疾患 精神障害者の医療 予防対策 学校保健： 学校保健管理（健康管理・健康相談 環境管理） 感染症対策 児童・生徒の疾病異常
15	母子保健： 母子保健指標 母子保健法に基づく保健対策 母子保健事業（健やか親子21-第二次）
16	地域保健： 保健所・市町村（市町村保健センター）の役割・事業 国際保健： 二国間協力 多国間協力（国際機関 WHO の役割）
17	保健医療制度： 医療保険（被用者保険・国民健康保険） 後期高齢者医療制度 介護保険制度 公費負担医療（医療扶助など） 国民医療費
18	疫学： 疫学指標 疫学の方法（記述疫学 分析疫学-コホート研究・症例対照研究 介入研究） 結果の評価
19	期末試験
20	試験解説 まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	医学史			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期（前半）	1年	1	20
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓					加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論第6版」南江堂 「医療概論」医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。

授業の方法及び内容	講義形式で進める。柔道整復の成り立ちとして、まず柔道整復術の中世から近代に至る歴史を学ぶ。更に現代に至る道のりについて法制度化を中心にみながら、学習をすすめる。
到達目標	医学史を学ぶ重要性を理解して、柔道整復の成り立ち、柔道整復の現代的意義を理解し説明ができる。生涯学び続け、向上する柔道整復師としての資質を身につける。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す②ノートをまとめる③練習問題を見直す などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	全体として講義形式で進めるが、適宜グループワークを行う。小テストも実施する。欠席はたとえ一回であっても貴重な学習機会を失うことになる。安易に休まない。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点
------	--

授業計画

1	オリエンテーション（この授業の進め方、計画確認、アイスブレイク）
2	グループワーク「柔道整復術と柔道整復師」
3	柔道整復の歴史 1.（基本概念の成立、起源、古代、中世、近世）
4	柔道整復の歴史 2.（公認と単独法成立、指導要領の制定、柔道、現代的意義）
5	柔道整復の現在 1.（業務範囲と条文、業務禁止、施術制限、権能、限界）
6	柔道整復の現在 2.（業務禁止、施術制限、権能、限界）
7	柔道整復の現在 2.（X線と附帯決議、医接連携、受領委任制度）
8	柔道整復の現在 3.（説明と同意、守秘義務、医療契約の範囲、個人情報保護）
9	期末試験
10	試験解説と総括

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	実技	前期	1年	1	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝					水村 麻輝

教科書	『柔道大辞典』アテネ書房
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	実際に柔道を実技として行い礼儀作法、受身の技術の習得。
到達目標	柔道の認定実技審査の技術の習得。
準備学習の内容	準備運動。
授業期間全体を通じた授業の進め方	実際に柔道を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	柔道衣の着方、マナーについて
2	礼法 柔道衣の着方
3	礼法 基本動作 後受身
4	礼法 基本動作 後受身 横受身
5	礼法 基本動作 後受身 横受身 前受身
6	受身の復習
7	認定実技の流れの説明
8	受身通しでの練習
9	中間試験
10	礼法 受身 手技
11	礼法 受身 手技
12	礼法 受身 手技
13	礼法 受身 手技
14	投の形通しで練習
15	礼法 受身 腰技
16	礼法 受身 腰技
17	試験前練習
18	期末試験
19	試験解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年 (前期)	1 年	4	80
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：6年 専門学校等勤務：7年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	機能と解剖から学び、理解を深める。 単元ごとに小テストを実施し、学習到達度を確認する。 担当教員は医療施設 (接骨院・整形外科等) において、6年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	(1) 診察について理解できる (2) 治療法について理解できる (3) 外傷予防について理解できる (4) 上腕骨遠位端部骨折について理解できる (5) 肘関節の脱臼について理解できる
準備学習の内容	関連する骨や筋について事前に学習する
授業期間全体を通じた授業の進め方	アウトプットを中心とした学習を心がける。 単元ごとに小テストを実施する

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点
------	--

授業計画

1	オリエンテーション 診察
2	治療法 [後療法①]
3	治療法 [後療法②] [指導管理] 第1回小テスト
4	外傷予防 第2回小テスト
5	肘関節部の損傷 [機能と解剖] 上腕骨遠位端部骨折 [上腕骨顆上骨折①]
6	上腕骨遠位端部骨折 [上腕骨顆上骨折②] 第3回小テスト
7	上腕骨遠位端部骨折 [上腕骨顆上骨折③]
8	上腕骨遠位端部骨折 [上腕骨外顆骨折①] 第4回小テスト
9	上腕骨遠位端部骨折 [上腕骨外顆骨折②]
10	上腕骨遠位端部骨折 [上腕骨内側上顆骨折] 第5回小テスト
11	上腕骨近位端部骨折 [橈骨近位端部骨折①] 第6回小テスト
12	上腕骨近位端部骨折 [橈骨近位端部骨折②] [肘頭骨折] 第7回小テスト
13	肘関節の脱臼 [前腕両骨脱臼①] 第8回小テスト
14	肘関節の脱臼 [前腕両骨脱臼②] [橈骨頭単独脱臼] [肘内障] 第9回小テスト
15	肘関節の脱臼 [肘内障] 第10回小テスト
16	治療法まとめ
17	上腕骨遠位端部骨折まとめ
18	肘関節の脱臼まとめ
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年（後期）	1年	(4)	(80)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：6年 専門学校等勤務：7年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	機能と解剖から学び、理解を深める。 単元ごとに小テストを実施し、学習到達度を確認する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、6年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	(1) 肘関節部の軟部組織損傷が理解できる (2) 前腕部骨幹部骨折が理解できる (3) 前腕部の軟部組織損傷が理解できる
準備学習の内容	関連する骨や筋について事前に学習する
授業期間全体を通じた授業の進め方	アウトプットを中心とした学習を心がける。 単元ごとに小テストを実施する

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点
------	--

授業計画

1	オリエンテーション 前期復習
2	肘関節部の軟部組織損傷① [靭帯損傷] [野球肘] [テニス肘]
3	肘関節部の軟部組織損傷② [靭帯損傷] [野球肘] [テニス肘] 第1回小テスト
4	前腕部の損傷 [解剖と機能] 前腕骨・骨幹部骨折 [橈骨・骨幹部骨折] 第2回小テスト
5	前腕骨・骨幹部骨折 [橈骨・骨幹部骨折] 第3回小テスト
6	前腕骨・骨幹部骨折 [ガレアジ骨折] 第4回小テスト
7	前腕骨・骨幹部骨折 [ガレアジ骨折]
8	前腕骨・骨幹部骨折 [尺骨・骨幹部骨折] 第5回小テスト
9	前腕骨・骨幹部骨折 [尺骨・骨幹部骨折]
10	前腕骨・骨幹部骨折 [モンテギア骨折] 第6回小テスト
11	前腕骨・骨幹部骨折 [モンテギア骨折]
12	前腕骨・骨幹部骨折 [橈・尺両骨・骨幹部骨折] 第7回小テスト
13	前腕骨・骨幹部骨折 [橈・尺両骨・骨幹部骨折]
14	前腕部の軟部組織損傷 [前腕コンパートメント症候群] 第8回小テスト
15	肘関節部の軟部組織損傷まとめ 第9回小テスト
16	前腕骨・骨幹部骨折まとめ 第10回小テスト
17	前腕部の軟部組織損傷まとめ
18	総復習
19	期末試験
20	解答解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学Ⅱ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年（前期）	1年	4	80
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校等勤務：17年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、機能解剖を実施。 その後、発生機序、症状、治療法、予後の流れで解説する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、10年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	総論脱臼01 「脱臼の定義」
2	総論脱臼02 「脱臼の分類」
3	総論脱臼03 「脱臼の症状」
4	総論脱臼04 「脱臼の整復」
5	総論脱臼05 「脱臼の整復障害」
6	総論脱臼06 「脱臼の予後」
7	上肢(手)の脱臼01 「遠位橈尺関節脱臼」
8	上肢(手)の脱臼02 「橈骨手根関節脱臼」
9	上肢(手)の脱臼03 「月状骨脱臼および月状骨周囲脱臼」
10	上肢(手)の脱臼04 「手根中手関節脱臼」
11	上肢(手)の脱臼05 「第1中手指節関節脱臼01」
12	上肢(手)の脱臼06 「第1中手指節関節脱臼02」
13	上肢(手)の脱臼07 「中第2～5手指節関節脱臼」
14	上肢(手)の脱臼08 「近位指節間関節脱臼」
15	上肢(手)の脱臼09 「遠位指節間関節脱臼」
16	上肢(手)の骨折01 「手根骨骨折01」
17	上肢(手)の骨折02 「手根骨骨折02」
18	上肢(手)の骨折03 「中手骨骨折01」
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学Ⅱ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（後期）	1年	(4)	(80)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校等勤務：17年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、機能解剖を実施。 その後、発生機序、症状、治療法、予後の流れで解説する。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、10年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	上肢(手)の骨折04「中手骨骨折02」
2	上肢(手)の骨折05「中手骨骨折03」
3	上肢(手)の骨折06「中手骨骨折04」
4	上肢(手)の骨折07「指骨骨折01」
5	上肢(手)の骨折08「指骨骨折02」
6	上肢(手)の骨折09「指骨骨折03」
7	上肢(手)の骨折10「まとめ」
8	上肢(手)の軟損01「腱系の損傷01」
9	上肢(手)の軟損02「腱系の損傷02」
10	上肢(手)の軟損03「腱系の損傷03」
11	上肢(手)の軟損04「靭帯系の損傷01」
12	上肢(手)の軟損05「靭帯系の損傷02」
13	上肢(手)の軟損06「骨系の損傷01」
14	上肢(手)の軟損07「骨系の損傷02」
15	上肢(手)の軟損08「神経系の損傷01」
16	上肢(手)の軟損09「神経系の損傷02」
17	上肢(手)の軟損10「変形系の損傷01」
18	まとめ
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学Ⅲ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：8年 専門学校等勤務：1年2ヶ月		水村 麻輝

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復学・実技編

授業の方法及び内容	<p>パワーポイントを用いて授業を行う。</p> <p>且つ現場での私の経験や実際の患者さんにはどのような処置を行うかなどを伝えていく。</p> <p>担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、8年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。</p>
到達目標	上肢の総論、各論の項目を知識、技術の習得。
準備学習の内容	固定具の作り方や固定法、検査法の学習
授業期間全体を通じた授業の進め方	実技と臨床を交えて学習する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	骨の性質について
2	骨折の分類
3	骨折線の分類
4	骨折の症状
5	併発症～後遺症
6	小児骨折～高齢者骨折
7	骨折の癒合日数
8	骨折の整復法
9	総論の復習
10	鎖骨骨折①
11	鎖骨骨折②
12	肩甲骨骨折
13	上腕骨骨折（骨頭～解剖頸）
14	上腕骨外科頸骨折
15	肩関節脱臼①
16	肩関節脱臼② 大結節骨折 小結節骨折
17	試験前練習
18	期末試験
19	試験解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	1年	4	80
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝			接骨院等勤務：8年 専門学校等勤務：1年2ヶ月		水村 麻輝

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復学・実技編

授業の方法及び内容	<p>パワーポイントを用いて授業を行う。前期に吸収した知識、技術の向上に努める。</p> <p>且つ現場での私の経験や実際の患者さんにはどのような処置を行うかなどを伝えていく。</p> <p>担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、8年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。</p>
到達目標	上肢骨折総論、各論の項目を知識、技術の習得。
準備学習の内容	固定具の作り方や固定法、検査法の学習
授業期間全体を通じた授業の進め方	実技と臨床を交えて学習する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	前期の復習
2	肩関節周囲炎 ルーズショルダー
3	スラップリージョン ベネットリージョン
4	腱板損傷
5	上腕二頭筋長頭腱損傷
6	骨折総論 復習
7	骨折の整復法
8	鎖骨骨折 理論演習
9	鎖骨骨折 実技演習
10	胸鎖関節脱臼 肩鎖関節脱臼 復習 演習
11	肩甲骨骨折 復習 演習
12	上腕骨骨折（骨頭～解剖頸）外科頸骨折 復習
13	外科頸骨折 実技 理論 復習
14	肩関節脱臼 実技 理論 復習
15	上腕骨骨幹部骨折 理論 復習 演習
16	上肢軟部組織損傷 まとめ
17	試験前練習
18	期末試験
19	試験解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学Ⅰ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	1年	(4)	(80)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：9年 専門学校等勤務：9年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	教科書で学び、プリントにまとめ、学習成果を国家試験過去問題にて確認する。
到達目標	頭部・顔面、胸部、脊椎の骨折、脱臼および軟部組織損傷について、①分類②発生機所③症状④治療法⑤合併症を患者に説明できるようになる。また該当部位の、①骨(名称)②筋(起始・停止・作用)③神経(支配領域)を何も見ずに記述することができるようになる。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、9年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
準備学習の内容	該当範囲の解剖学(骨・筋・神経)
授業期間全体を通じた授業の進め方	単元毎に小テストを実施し、学習到達度を確認する。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

臨床柔道整復学 I-2 (後期) 授業計画

1	オリエンテーション (シラバス、授業の進め方、評価方法)・該当部位の解剖
2	1-1 頭部、顔面部の損傷 A 頭部、顔面部の解剖と機能 1-1 頭部、顔面部の損傷 B 頭部、顔面部の骨折 (頭蓋骨骨折・顔面頭蓋骨折)
3	1-1 頭部、顔面部の損傷 B 頭部、顔面部の骨折 (頭蓋骨骨折・顔面頭蓋骨折)
4	1-1 頭部、顔面部の損傷 C 顎関節脱臼 (前方脱臼・後方脱臼・側方脱臼)
5	1-1 頭部、顔面部の損傷 C 顎関節脱臼 (前方脱臼・後方脱臼・側方脱臼) 1-1 頭部、顔面部の損傷 D 頭部、顔面部の軟部組織損傷 (頭部、顔面部打撲)
6	1-1 頭部、顔面部の損傷 D 頭部、顔面部の軟部組織損傷 (顎関節症・外傷性顎関節損傷)
7	1-2 頸部の損傷 A 頸椎の解剖と機能 B 頸椎の骨折 (上位頸椎骨折・中、下位頸椎骨折) 1-2 頸部の損傷 B 頸椎の骨折 (上位頸椎骨折・中、下位頸椎骨折)
8	1-2 頸部の損傷 C 頸椎脱臼 (環軸関節の脱臼および脱臼骨折・下位頸椎の脱臼および脱臼骨折)
9	1-2 頸部の損傷 D 頸部の軟部組織損傷 (外傷性頸部症候群・胸郭出口症候群・寝違え)
10	1-2 頸部の損傷 E 注意すべき疾患 (斜頸・頸椎椎間板ヘルニア・頸椎症・後縦靭帯骨化症・頸椎の炎症性病変・外傷性腕神経叢麻痺・分娩麻痺・副神経麻痺・長胸神経麻痺・頸髄損傷・先天性奇形)
11	1-3 胸・背部の損傷 A 胸・背部の解剖と機能 B 胸部の骨折 (肋骨骨折・肋軟骨骨折・胸骨骨折)
12	1-3 胸・背部の損傷 B 胸部の骨折 (肋骨骨折・肋軟骨骨折・胸骨骨折)
13	1-3 胸・背部の損傷 C 胸椎の骨折 (上部胸椎棘突起骨折・胸椎の椎体骨折) 1-3 胸・背部の損傷 D 胸椎の脱臼 (胸椎部脱臼骨折・胸腰椎移行部脱臼骨折)
14	1-3 胸・背部の損傷 D 胸椎の脱臼 (胸椎部脱臼骨折・胸腰椎移行部脱臼骨折) 1-3 胸・背部の損傷 E 胸・背部の軟部組織損傷 (胸肋関節損傷・肋間筋損傷・胸背部打撲・背部の軟部組織損傷)
15	1-3 胸・背部の損傷 F その他の疾患 G 注意すべき疾患 1-4 腰部の損傷 A 腰部、仙骨部の解剖と機能
16	1-4 腰部の損傷 B 腰椎の骨折 (下位腰椎椎体圧迫骨折・チャンス骨折・腰椎椎体破裂骨折・腰椎肋骨突起骨折)
17	1-4 腰部の損傷 B 腰椎の骨折 (下位腰椎椎体圧迫骨折・チャンス骨折・腰椎椎体破裂骨折・腰椎肋骨突起骨折) 1-4 腰部の損傷 C 腰椎の脱臼
18	1-4 腰部の損傷 D 腰部の軟部組織損傷 (関節性・靭帯性・筋、筋膜性) E その他の疾患 F 注意すべき疾患 1-4 腰部の損傷 E その他の疾患 F 注意すべき疾患 □頭部、体幹範囲の総復習
19	期末試験
20	解答および解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実技	前期後半・後期 前期 (後半)	1年	2	60
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：6年 専門学校等勤務：7年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。 担当教員は医療施設 (接骨院・整形外科等) において、6年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	(1) 肩関節前方脱臼が理解できる (2) 肩鎖関節脱臼が理解できる (3) 肘関節脱臼が理解できる (4) 鎖骨骨折が理解できる (5) 上腕骨外科頸が理解できる (6) コーレス骨折が理解できる
準備学習の内容	(1) 上肢の機能と解剖を理解できる
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。	

評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点
------	--

授業計画

1	オリエンテーション 診察
2	肩関節脱臼
3	肩鎖関節脱臼
4	肘関節脱臼 肘内障
5	鎖骨骨折
6	上腕骨外科頸骨折
7	コーレス骨折
8	復習
9	期末試験
10	解答解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実技	前期後半・後期 (後期)	1年	(2)	(60)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：6年 専門学校等勤務：7年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、6年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	(1) 肩関節前方脱臼の診察及び整復法が出来る (2) 肩関節前方脱臼の固定が出来る (3) 肩鎖関節上方脱臼の診察及び整復法が出来る (4) 肩鎖関節上方脱臼の固定が出来る
準備学習の内容	(1) 肩関節部の機能と解剖を理解できる (2) 鎖骨部の機能と解剖を理解できる
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要な出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点
------	--

授業計画

1	オリエンテーション 肩関節前方脱臼 整復
2	肩関節前方脱臼 固定
3	肩鎖関節上方脱臼 整復
4	肩鎖関節上方脱臼 固定
5	肘関節後方脱臼 整復
6	肘関節後方脱臼 固定
7	鎖骨骨折 整復
8	鎖骨骨折 固定
9	上腕骨外科頸骨折 整復
10	上腕骨外科頸骨折 整復
11	コーレス骨折 整復
12	コーレス骨折 固定
13	脱臼復習①
14	脱臼復習②
15	骨折復習①
16	骨折復習②
17	骨折復習③
18	期末試験
19	解答解説
20	上腕骨骨幹部骨折 固定

授業計画書

基本情報	科目名称	包帯実技			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実技	前期・後期前半 (前期)	1年	2	60
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小武 悠希			接骨院等勤務：7年 専門学校等勤務：4年		小武 悠希

教科書	『包帯固定学』南江堂
参考文献・資料等	授業により必要なものを資料として配布する。

授業の方法及び内容	固定具や包帯法の意義と注意事項の説明および担当教員によるデモンストレーションの後、学生同士で2人1組もしくは3人1組となり練習をする。 担当教員は医療施設(接骨院・整形外科等)において、7年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	正しい包帯の巻き方や強さ、外観の美しい包帯はもとより、患者役を務めることにより、患者の視点からも適した包帯固定学を習得する。
準備学習の内容	教科書や資料を使つての学習や、固定具の作製など
授業期間全体を通じた授業の進め方	一定の範囲が終了した時など、折を見て復習を行う。このように復習を重視して、技術の向上を図っていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	ガイダンス、包帯の持ち方や巻き戻し
2	基本包帯法① 環行帯、螺旋帯、蛇行帯
3	基本法帯法② 復習、折転帯
4	基本包帯法③ 亀甲帯、麦穂帯
5	部位別包帯法① 肩関節
6	部位別包帯法② 肘関節・前腕部
7	部位別包帯法③ 手関節・手指部
8	試験前復習
9	中間試験
10	部位別包帯法④股関節・膝関節
11	部位別包帯法⑤下腿・足関節
12	部位別包帯法⑥足関節・足趾
13	見学型臨地実習①（医療倫理・態度・心構え・清潔保持・守秘義務）
14	見学型臨地実習②（問診・ROM・MMT の評価・徒手検査）
15	見学型臨地実習③（患者の誘導および介助・後療法と物理療法の適応と禁忌）
16	見学型臨地実習④（施術録の作成・社会保障）
17	試験前復習
18	期末試験
19	結果発表・試験解説・総評・硬性材料を利用した固定（キャスト・上肢）
20	前期まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	包帯実技			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実技	前期・後期前半 (後期 (前半))	1年	(2)	(60)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小武 悠希			接骨院等勤務：7年 専門学校等勤務：4年		小武 悠希

教科書	『包帯固定学』南江堂
参考文献・資料等	授業により必要なものを資料として配布する。

授業の方法及び内容	固定具や包帯法の意義と注意事項の説明および担当教員によるデモンストレーションの後、学生同士で2人1組ないし3人1組となり練習をする。 担当教員は医療施設（接骨院・整形外科等）において、7年間勤務した経験があり、実務経験に基づいて柔道整復師養成に向けた授業を展開する。
到達目標	正しい包帯の巻き方や強さ、外観の美しい包帯はもとより、患者役を務めることにより、患者の視点からも適した包帯固定学を習得する。
準備学習の内容	教科書や資料を使つての学習や、固定具の作製など
授業期間全体を通じた授業の進め方	一定の範囲が終了した時など、折を見て復習を行う。このように復習を重視して、技術の向上を図っていく。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	デゾー包帯
2	ヴェルポー包帯、ジュール包帯
3	十字帯
4	三角巾、さらし包帯
5	複頭帯、単頭帯
6	二頭帯、投石帯
7	試験前復習
8	期末試験
9	結果発表・試験解説・総評・硬性材料を利用した固定（キャスト・下肢）
10	年間総まとめ